法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-06

〈益田勝実の生涯と仕事〉追跡と証言 ： 年譜と写真でたどる

岡田，清子 / 天野，紀代子

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文学誌要
(巻 / Volume)
97
(開始ページ / Start Page)
24
(終了ページ / End Page)
39
(発行年 / Year)
2018-03-24

〈Ⅰ　益田勝実の生涯と仕事〉

追跡と証言

――年譜と写真でたどる――

天野　紀代子
岡田　清子

緒言　「特別企画：『火山列島の思想』から五十年―今、益田勝実を―」というタイトルを掲げました。『火山列島の思想』は、みなさんご存じの、益田先生のご著書で、刊行は、一九六八年です。半世紀経って、我々は、改めて益田先生のお仕事の意味を、もう一度真剣に考えていきたいと思うわけです。

最初は、天野先生、岡田清子さんの対談という形で、益田先生の人生や研究についてお話していただきます。天野先生は、益田先生の許で学部・大学院とずっと研究をしておられました。岡田清子さんは、益田先生の姪御さんでいらっしゃって、研究はもちろん、それ以上に人生を共に歩まれた方だと、私は承知しております。

お二人のお話を伺って、その後、益田先生の、岩波市民セミナーでのお話をお聴きいただきます。益田先生の講義を聴いたことがある方は、ひょっとしたら、もう少数派かもしれません。益田先生の生の声を、と思ったのですが、もちろんあの世から来ていただくわけにはいかないので、いろいろ探しましたところ、一九九〇年、益田先生が説話文学をテーマにお話をされたテープが見つかりまして、それを編集いたしました。

それでは天野さん、岡田さん、よろしくお願いいたします。

（坂本勝）

天野　益田先生の生涯を、便宜的に四期に分けました。「年譜」をご覧ください。「誕生から十代二十代」を一期とし、その後、「大学卒業後の十五年」を二期としました。三期としましては、「法政大学専任での二十三年間」。四期目が、「定年退職後、そして

晩年」としました。一期ごとに、岡田さんからお話を伺う、という形式にしますので、どうぞよろしくお願いいたします。

益田先生は、一九二三年、下関にお生まれになった。益田家というのは関ヶ原の戦いに敗れて、石見益田の地を捨ててこの下関に逃れてきた、という経緯があるらしく（「アポロギアとアポリアと―梅原猛氏に―」『文学』一九七五、一二）、そのことは、先生の生涯に関係があっただろうと思われます。

家の学問としては、漢文を教わるチャンスがあった。そして中学生ぐらいになると、西洋哲学を専攻したい夢があって、教会の牧師にギリシア語を習い始めるというような、文学少年だったということです。中学校の昼食費二十銭を切り詰めて文庫本を買いあさっていた、という話なども、あとで岡田さんから聞きます。

さきほど、岡田清子さんは益田先生の姪御さんだ、と紹介がありましたけど、清子さんは、たった五歳しか年下でない。妹のような存在で、生涯にわたって、〝お兄ちゃまお兄ちゃま〟と言って、益田先生と共に生きてこられたので、私からみると、妹さんのように見えてしまいます。子供時代のことだってご存じの存在なのだ、ということを紹介しておきます。

益田先生は、十八歳の時に、国民学校の助教をしながら、中等教員検定試験を目指す、と「年譜」の一九四一年のところに書きました。まだ十八歳ですよ、そんなときに、その生徒さんたちに、「僕は生涯、独学・独身を通すんだ」って話したそうです。これは、後に聞いた話で、びっくりなんですけれど。証人が何人かいるんですね。

そして、学費の安い二松学舎へ。年間五十円と、書いてありました。二松学舎に入ったのは、「学費が続くうちに中等教員の国家試験に合格したい」という志があったからなんだそうです。それで、兵役免除になるのかと思ったらそうではなく、翌年に学徒出陣令が出て、二松学舎では出陣壮行会というのが催されたそうです。

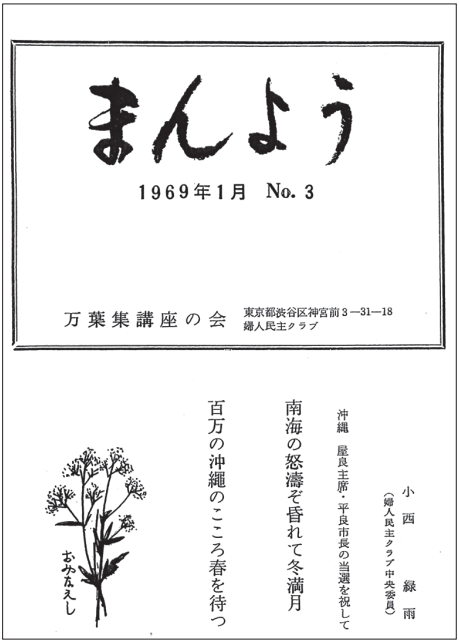
一九四三年、二十歳のところをご覧ください。万葉学の森本治吉教授に「〝大君の醜（しこ）の御楯（みたて）〟として疑わずに出征せよ」と言われ、「果たして防人歌はそう読むべきものだろうか？」という疑問から出発し、戦場までずっと『万葉集』の岩波文庫上下二冊本――白文の本だって聞いています――を携行したということが、「万葉集を焼いた日」に書かれています。

『まんよう』という機関誌があります。益田先生は、婦人民主クラブで、万葉集講座を一九六七年から二十年もなさっていたんですけれど、そこで発表したものです。

そこに詳しく、戦地での話などが書かれています。そして、ずっと持ち歩いていたこの『万葉集』を、敗戦の数日前、八月の十日か十一日に、もう生きては帰れないだろうと思ったので全部焼いた、ということが、この「万葉集を焼いた日」には書かれています。

翌年、復員するわけですけれども、その時に、父上の死亡、下関の実家も全部空襲で焼けてしまった、ということを聞かされるわけです。ですから、故郷喪失の自己体験によって、国境前線で逃亡して捕えられた防人の心境がわかり始めた、とそこには書かれています。

雑誌『まんよう』の表紙、および「万葉集を焼いた日」のページ


まんよう

1969年1月 No. 3

万葉集講座の会 東京都渋谷区神宮前3—31—18 婦人民主クラブ

小西 緑雨（婦人民主クラブ中央委員）

沖縄 屋良主席・平良市長の当選を祝して

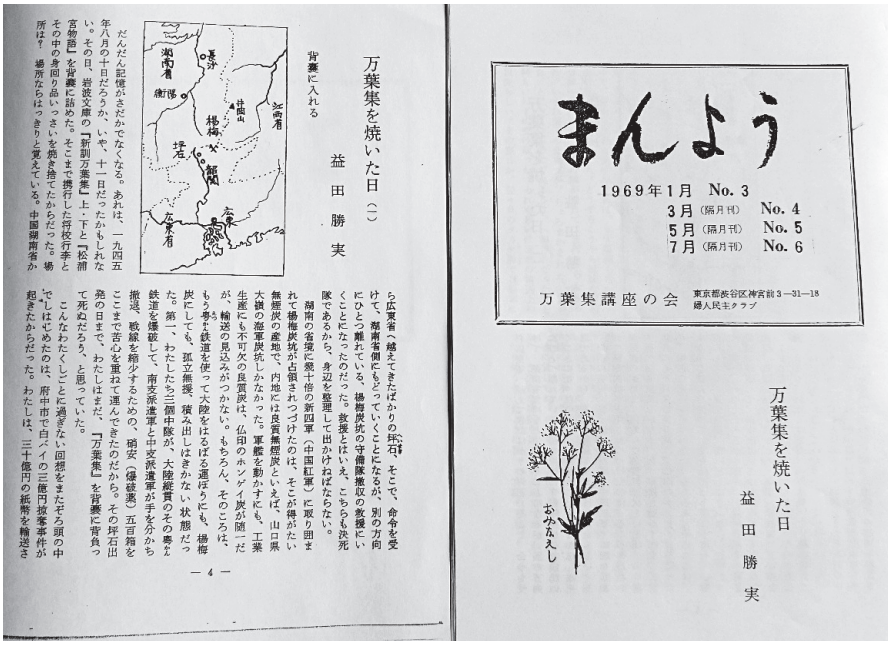
南海の怒濤ぞ昏れて冬満月

百万の沖縄のこころ春を待つ

おみなえし

そのように、益田先生の学問というのは、戦前の、『万葉集』『古事記』の読みが戦争の翼賛につながったような、そういうものに対する違和感から出発していて、とりわけ防人歌などは、自らの体験を重ね、身に沁みた実感として、理解していた、というのが出発点だったと思います。

もうひとつ、この第一期で言いたいことは、「独学」ということの中身です。益田先生は、大学に入る前に、既になかなか実証的な考証能力を身につけています。「年譜」の二十四歳のところを見てください。ここで、投稿論文「播磨風土記は天平元年以後か」というのがあります。単なる地方の歴史好きの若


まんよう

1969年1月 No. 3

3月（隔月刊） No. 4

5月（隔月刊） No. 5

7月（隔月刊） No. 6

万葉集講座の会 東京都渋谷区神宮前3—31—18 婦人民主クラブ

万葉集を焼いた日

益田勝実

おみなえし

万葉集を焼いた日（一）

益田勝実

背嚢に入れる

湖南省 長沙 衡陽 桂田山 江西省 楊梅 坪石 韶関 広東省 広東

だんだん記憶がさだかでなくなる。あれは、一九四五年八月の十日だろうか、いや、十一日だったかもしれない。その日、岩波文庫の『新訓万葉集』上・下と『松浦宮物語』を背嚢に詰めた。そこまで携行した将校行李とその中の身回り品いっさいを焼き捨てたからだった。場所は？　場所ならはっきりと覚えている。中国湖南省から広東省へ越えてきたばかりの坪石、そこで、命令を受けて、湖南省側にもどっていくことになるが、別の方向にひとつ離れている、楊梅炭坑の守備隊撤収の救援にいくことになったのだった。救援とはいえ、こちらも決死隊であるから、身辺を整理して出かけねばならない。

湖南の省境に幾十倍の新四軍（中国紅軍）に取り囲まれて楊梅炭坑が占領されつづけたのは、そこが得がたい無煙炭の産地で、内地には良質無煙炭といえば、山口県大嶺の海軍炭坑しかなかった。軍艦を動かすにも、工業生産にも不可欠の良質炭は、仏印のホンゲイ炭が随一だが、輸送の見込みがつかない。もちろん、そのころは、もう粤ちん鉄道を使って大陸をはるばる運ぼうにも、楊梅炭にしても、孤立無援、積み出しはきかない状態だった。第一、わたしたち三個中隊が、大陸縦貫のその粤ちん鉄道を爆破して、南支派遣軍と中支派遣軍が手を分かち撤退、戦線を縮少するための、硝安（爆破薬）五百箱をここまで苦心を重ねて運んできたのだから。その坪石出発の日まで、わたしはまだ、『万葉集』を背嚢に背負って死ぬだろう、と思っていた。

こんなわたくしごとに過ぎない回想をまたぞろ頭の中でしはじめたのは、府中市で白バイの三億円掠奪事件が起きたからだった。わたしは、三十億円の紙幣を輸送さ

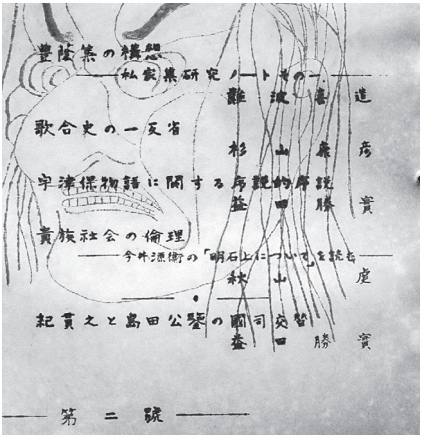
— 4 —

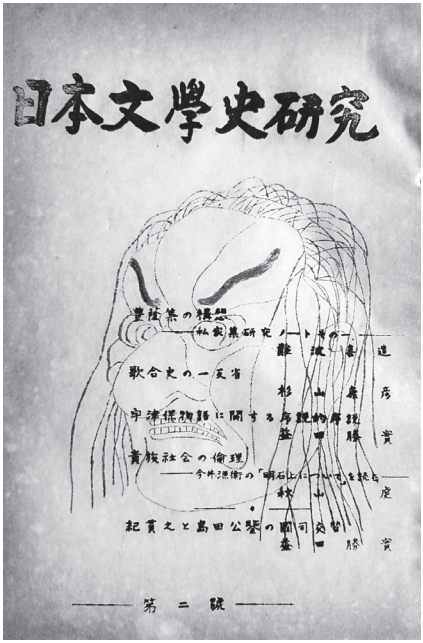
者ですよ。その投稿論文が、林屋辰三郎の目にとまって、専門書である『日本史研究』（第6号）に掲載された。それで、益田先生は「東京にいって勉強したい」と強く思うようになった、そのきっかけになった論文です。『風土記』の成立年代を考証したという大変なものですが、そういうことができた。

あるいはまた、大学に入ってすぐなんですけれど、萩谷朴の家の離れに下宿していた、知らない人は「えぇ！」なんて思うようなことなんですけれど。その時に、「外記補任」という史料を見ていて、『土佐日記』で紀貫之と交替した新任の国司が〝島田公鑒（しまだきみあき）〟だと発見するんですね。それは、その後、萩谷朴が編纂する『土佐日記』の本には必ず明記されています。そういう発見は、大学で学ぶ以前のことなんです。

大学二年生になると、日本文学史研究会というのを主催し、ガリ版刷りの機関誌『日本文学史研究』を出していきます。その第一号に、「紫式部日記の新展望」というのを発表します。これは、大学二年の時の池田亀鑑の単位レポートとして提出したっていうんですから、もう驚いてしまいますね（笑）。「紫式部日記の新展望」というのは、『紫式部日記』を読む人の必読論文として、私たちは読んだわけです。それは、人物考証を主とした研究なわけですが、先生の「独学」というものは、そういう実証的な考証から始まった。

『日本文学史研究』は、一九四九年から二十号まで出していきます。創刊号の巻頭言には、「我々は日本文学の研究が、今や自らの手で変革していかなければならない時期に達した」「飽く迄具体的に、新しい研究の出発を準備する為、共同研究を突





『日本文学史研究』第二号の表紙（目次付）

き進めよう」と謳われています。そういう志で、学年が一年上の難波喜造、杉山康彦、それから秋山虔などと共同での研究が始められます。

新しい時代の文学研究・古典研究というのが、彼らの目指すところだった。益田先生は、手業としては考証能力があって、実証的なことができたんですけれど、志は、新しい時代の文学を、古典研究を、という二刀流で進んだ、ということを知っておきたいと思います。

卒業論文は、この『日本文学史研究』にどんどん載せたもの、ほとんど全部を、これだけのことを書いたという証拠物件として、約三千枚重ねて出した。先生は、「統一はないんだ」と謙遜していらっしゃいましたが、「ただこれだけ考え事をした」というものを重ねて、久松潜一・池田亀鑑に提出した。「私の卒業論文」という文章（一九七一年）には、「先生方は困っただろう、迷惑しただろう」というようなことが書かれています。

岡田清子さんは、一九五〇年に、益田先生の後を追って、東大の国史に入られました。岡田さんの専攻は考古学で、この『日本文学史研究』の中にも〝岡田清子〟の名前が出てくるように、研究仲間・後輩として、このあたりからずっと先生の後を追ってこられた。『火山列島の思想』の最初の論文「黎明」の注の二番目に挙げられているのは、岡田清子の『横浜市史』からの引用です。縄文時代の集落の形態なんかが参照されているわけです。

子供時代のことも含めて、岡田さん、どうぞお話しください。

岡田　叔父の一生を四期に分けてお話を進めてくださって、感激しております。私にとっては叔父なんですけれども、私は益田勝実の妹だっていうふうにも考えられる、と言われて……、私、「お兄ちゃまお兄ちゃま」って子供の時に言ってて、それで亡くなるまでも亡くなっても、ずっと「お兄ちゃま」で通しましたんですが。一片も、妹という自覚はなかったので、八十年も経って私は妹だって言われたのは、とってもショックでした。それが一番はじめの、天野先生に対する抗議かしら（笑）。

私がお兄ちゃまを発見したのは、昔の年で五つ、三歳ちょっとだった時のことです。その頃は東京にいましたが、夏休み、一歳になる前にも、父方の出雲の家、それから母方の下関の家に、家族三人でご挨拶まわりをしてるんですね。その一回目の時のことは全然記憶にございません。で、二回目の下関に行ったとき、初めてお兄ちゃまを発見するわけです。それはどういうことかと言いますと、お兄ちゃまが、割り箸をたくさん持ってきて、割り箸をくるくる巻いたり、並べたりなんかして、ボートを作って、そのボートに柱を立てて、ちょっと紙で帆をかけて、ヨットを作ったんですね。で、「キヨコちゃんあそこに葉っぱがあるからとってきて」って言われて、ユキノシタを私がとってきてみると、さっき浮かんでいた洗濯だらいの中のボートがたらいの中を廻ってるんです。びっくりしちゃって。「あれっ」って言って急いで手を叩いたんですよね。で、そのときに、「ボートが水の中で走りまわる、そんなものをお兄ちゃまは作ったんだ、お兄ちゃまは偉いんだなあ」と思って。それが一番はじめのお兄ちゃまの発見でした。お兄ちゃまはそのときに私に向こ

うに行かせておいて、樟脳をボートにくっつけたんですね。樟脳を付けたからボートが回り始めたっていう、そういうことをやった人だったんです。

夏休みに私が来るというので、四月頃から、買ってもらった雑誌の付録を全部とっといて、それで「キヨコちゃんがきたらこれを一緒につくろう」と言って、それは畳の上で作りましたけれども、たらいの水の中を走るボートっていうのは初めてで、本当に驚きました。私は長女で、上の人がいなかったものですから、お兄ちゃまが本当にお兄ちゃまだったわけです。

それからしばらくして、私の家は東京から都落ちしまして、岡山県の高梁、信州の軽井沢、そしてまた東京に帰ってきて、小学校四年生の時に、はじめて下関の対岸の門司で生活をするようになります。門司の生活が五年くらいだったと思うんですけれども、そのころは、ふた月に一回くらいは、下関からお兄ちゃまかお祖母ちゃまがきて、下関のお魚を持ってきてくれたりなんかしてたんですけれども、こちらから行くこともありました。

いつか行った時のことですが、「本を買ってあげるからついておいで」って言われて、それで後ろをトコトコついていきました。本屋さんにいくと、お兄ちゃまはすぐ本棚から一冊の本をとりだして、お金を払って、歩きながら帰り道はずっとそれを読みながら帰ってきたわけです。帰ってきていよいよその小さなかわいらしい本を私にもらえるんだと思って手をだしたら、「これはちょっとまずかった、清子ちゃんにはまだちょっと難しい」って言って、とうとうその本はもらえませんでした。あとでしばらく経ってから、お兄ちゃまの本棚を見ますと、それは、芥川の『河童』だったと思います。そういうようなこともございました。

門司に行きました時に、お兄ちゃまは二冊の本をプレゼントしてくれました。それは、二つ下の弟にも、長女と長男にくれたんですが、その一つは、『ピノチヨ』（『ピノキオ』）、もう一つは『フランダースの犬』でした。なぜ『ピノチヨ』のことを申しあげるかといいますと、そののち叔父が下関中学に入りまして……あの人は徒党を組むのが上手なんですね、徒党を組む人なんです……、それで何人かのグループのお友達に、まず一番最初に見せたのが、その『ピノチヨ』でした。一人が早速それを、絵のところはその絵をそのまま写す、文字のところも写して、自分で『ピノチヨ』の本を作っちゃったんです。

それから十何年か経ってですけれども、南多摩郡鶴川（現町田市）の安全寺、日本文学史研究会の雑誌を作るようになったが、その子たちが持っていた玉川学園の『愛吟集』を見ましたら、『ピノチヨ』の歌が載ってまして、一緒に子供達と歌った、その時に「清子ちゃんにあの時あげた『ピノチヨ』は僕の中学の時の友達がみんな一冊ずつ自分で書いて持ったんだよ」って、そういうふうに教えられたわけです。私がもらった『ピノチヨ』は、ポスターカラーのライトブルーで真っ青に塗られて、それに墨で〝ピノチヨ　西村アヤ（石田アヤ）〟と書かれた、西村伊作さんが子供達に初めてピノチヨの話をイタリア語から訳しながら聞かせた、それを一番上の娘さんのアヤさん

が書いたんで、それが本になった、そういう本で、その本を、私の母が自分の一番下の弟である勝実に送った謂れのある本だったんです。戻ってきたら表紙はぼろぼろになってて、それで叔父が新しくまた自分で表紙を付け、ポスターカラーで塗って、表題も付けた、その本を、小学四年生の時にくれたのでした。

その話のついでに。そのあと叔父は、「アンドロメダの大星雲までも」という表題を付けた話をＢ４の原稿用紙に、枡目は考えずに、どんどん書いたものを送ってきたり、書き足して持ってきてくれたりしてました。その一つは、「平家の一杯水」（壇ノ浦の戦いに纏わる話）というもの、もう一つは「厚狭の寝太郎さん」（所謂「三年寝太郎」の類話）というお話でした。

「平家の一杯水」っていうのは、和布刈神事っていう、松本清張の書かれている推理小説（『時間の習俗』）にあります、門司側の和布刈神社の大晦日の晩のワカメを刈る神儀ですけれども、あれに関連した、早鞆の瀬戸……関門海峡の一番東の、一番狭まっているところ……、そこの海峡で一日に二回の干満の差があるときに、ちょうど水が湧き出してくるところがあって、それを本州から九州の方へやってきた平家の軍勢が、のどを潤すことができたっていう話とつながっております。後に叔父が「飢えたる戦士」という論文を書いていますけれども、それなんかは、この関門の田舎に残っている早鞆の瀬戸の潮の満ち引きが排出した湧き水のこと、その湧き水を平家の軍勢が飲んで、大いに意気を発揚したという、それを一生懸命、小さな字でたくさん書いて。三枚くらいはあると思うんですけれども、その言葉が残っていないのが、いまとても残念に思います。

もう一つは、やっぱり下関の東の方の話なんですけれども、「厚狭の寝太郎さん」っていうお話がありまして、寝太郎の話は全国にたくさんございます。けれども、「厚狭の寝太郎さん」というのは、何にもしないでいっつも寝てばっかりいるのでついにみんなから〝寝太郎さん〟と言われるようになったっていうのが全国的に拡がった昔話の一つの形態なんですけれども、「厚狭の寝太郎さん」は、一生懸命寝て、挙げ句の果てに乾田になった田んぼに水を引くことを考えついて、その水で水田の開削をしたわけですね。そういう単なる、あとで自分だけがお金持ちになった、成功したとかっていう話の寝太郎ではなく、千町田（せんちょうだ）と今も言われている地名が下関の東側の宇部市との間にあります、その寝太郎さんの話なども、その時に書いてくれています。

そうそう、小泉八雲の紹介で有名な「耳なし芳一」もありました。

天野　文学史研究会のころのお話はありますか？

岡田　私が大学に入るようになりましたのは、叔父が大学に入ってみると、時枝先生の国語学科の方に、女子学生がおられて、その人と話していると、「なんだ、君は門司か。僕は下関だ」ということになって、「門司の女学校には『寒夕焼　ゴム風船を　膨らます』という俳句をつくった人がいるんだ」って話したんですね。「どうしてその句を知っているの？　それ私の句よ」と言ったのが、竹内美智子さんだったんです。

「門司高女の上級生が大学にきて勉強しているから、君も受験しなさい」っていうふうに言ってくれて、それで東京に来るようになって。東京にきたら一番に、水道橋のお店で、ガリ版のヤスリを買ってくれて、そのヤスリを一枚もらって、それで文学史研究会の原紙を切り始めたんです（笑）。

天野　ガリ版切り要員として駆り出されたんだと思いますけれども、岡田さん自身の論文も、『日本文学史研究』二十号の中にあります。

では、第二期を見ていきます。「大学卒業後の十五年」としましたけれど、その前の年、一九五一年に卒業し、就職先としては、東京都立神代高等学校の定時制の教諭となるわけです。その二年目……年譜で二十九歳というところ……、神代高校定時制の卒業生を中心メンバーとする「サークル・いしずえ」というのを主宰し、以後、読書学習・地域の生活向上・民俗採集・民謡採集、そういう社会文化活動に没頭します。

そういう活動の中には、「いしずえ」と染めぬいた旗のもとにデモ行進したり、彼らと一緒に山登りをしたりすることもあった。こういう山登りが、先生にとっては論文の重要なモチーフとなって、たとえば、奥多摩の月夜見山で見た光景から、「廃王伝説」なんていう論文……『火山列島の思想』の中に収められています……、そういうものに実を結んだりする。六十年安保の頃ですけれども。

大きな闘争としては、調布の米軍飛行場の土地を一部奪還するという闘いに、企画段階から全力で参加して、一つの勝利を

横田基地反対闘争のデモ行進

得るなどということもあり、写真のデモ行進は、すこしあとの横田基地反対闘争の時だと思いますが、そういう社会活動を一方でしながら、国語教師としては、現場でいくつもの研究を発表していきます。ちくま学芸文庫の『益田勝実の仕事』五巻目に収録されているような、国語教育論で、たくさん成果を上げています。

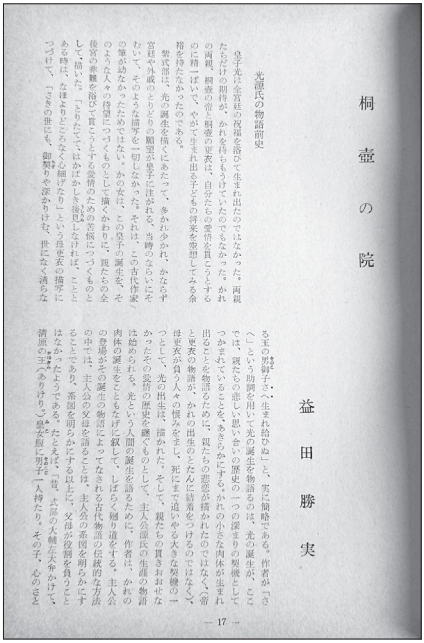
それにとどまらず、たとえば「王と子」なんていうヤマトタケル論があるんですが、それなどは、『火山列島の思想』の方に収録されている。教科書の学習指導の文章なんですが、それが立派な論文として成立していくわけです。

我々の周辺では、大学院卒業でも、中学・高校の教員になるのが普通のコースですけれど、「教員になると研究ができなくなる」などとぼやいたりすると、いつも戒められていました。現に、先生は、教育現場と研究活動というのを、別々のこととは見ず、実践されていたと思います。また、筑摩書房の国語教科書の編集委員も、精力的になさっていきます。

「年譜」の一九五五年のところをご覧ください。この年から、法政大学の非常勤講師になるわけです。以後十一年間は夜間高校を本務校とし、法政には非常勤で通ってこられた。つまり「大学卒業後の十五年」の後半十一年間は、大学の講師でもあったのですが、先生はことさら、夜学に勤めた「十五年」と区切って話題にしました。

一九六六年、四十三歳のときに書かれた回想記「私の卒業論文」には、次のようにあります。「卒業後、十五年間、夜学教師の生活と農村文化運動に埋没していた。」「国文学研究者とし

『日本文学誌要』復刊二号　表紙と「桐壺の院」の頁



桐壺の院

光源氏の物語前史

益田勝実

皇子光は全宮廷の祝福を浴びて生まれ出たのではなかった。両親たちだけの期待が、かれを待ちもうけていたのであるなかった。かれの両親、桐壺の帝と桐壺の更衣は、自分たちの悲恋を負わそうとするのに精一ぱいで、やがて生まれ出る子どもの将来を夢想してみる余裕を持たなかったのである。

紫式部に、光の誕生を描くにあたって、多かれ少かれ、かなる平宮廷や外戚のようどりの願望が基礎に置かれる、当時のならいそわりて、そのような期待を一切しなかった。それは、この古代物語の強が幼なかったためではない。かの紫式部は、この早子の誕生を、そのうえ女ゃ子待望につづくものとして、悲しく描くかわりに、現実たちの全後宮の葛藤とその苦悩とにつづくものとして描いた。「ものたって、以はかなき御慰になければ、ことにつづく行て、「さきの世にも、御契りや深かりけむ、世にもゝ清らなる玉の男御子さへ生れ給ひぬ」と、実に簡略である。作者が「さへ」という助詞を用いて光の誕生を物語るのは、光の誕生が、ここでは、現たちの悲しい思い合いの歴史の一つの深まりの契機として、つかまれていることを、あきらかにする。かれの小さな肉体が生まれ出ることを物語るために、現たちの悲恋が描かれたのではなく、帝と更衣が負う人々の期待が、かれの出生のうえに結着をつけるのではなく、母更衣が負う人々の憎みを、まともに、死にまで追いやる大きな契機の一つとして、光の出生に、描かれた。そして、親たちの貫きおおせなかったその悲劇の歴史を継ぐものとして、主人公源氏の生涯の物語は始められる。光という人間の誕生を語るために、作者は、かれの肉体の誕生をこともなげに叙述して、しばらく廻り道をする。主人公の登場がその誕生の物語によってなされる古代物語の伝統的な方法の中では、主人公の母をかたることは、主人公の系譜を明らかにすることであり、系譜を明らかにする以上、父母が役割を負うことはなかったようである。たとえば、「昔、武蔵の大舞左大弁かけて、清原の王（ありけり）皇女に、男子（一人持たり。その子、名のさと

ては大きなクレパスだった。」というふうな言い方です。この間は寄り道だった、だから大学の専任になった時はきつかった、などという言葉を、私たちも聞いたことがありますが、「大きなクレパス」「空白の十五年」って本人がおっしゃるのはとんでもないことで、この間に出された成果は、なかなかすごいものがあるので、挙げていってみたいと思います。

一つ目は、一九五九年の『日本文学誌要』復刊二号に載せられた、「桐壺の院」です。『日本文学誌要』は、戦前では近藤忠義先生が重要な立役者ですけれど、戦後は、益田先生の功績が大変あったと思います。もちろん、この時はまだ非常勤で、論文も終わりの方に掲載されていますが、この復刊二号の「桐壺の院」が、『火山列島の思想』の中では「日知りの裔の物語」というタイトルに変えて収録される、『源氏物語』論としては画期的なものだと思います。のちに、先生自身が、「それまでの文学史的関心と考証的なこだわりの二面をどうやら融合できそうに思えてきた論だ」というふうに総括していらっしゃいます（「私の源氏物語研究・源氏物語から学んだこと」『源氏物語講座（1）』勉誠社、一九九一年）。第一期のところで、考証的な手つきと文学研究の二刀流という話をしましたけれど、この第二期では、その融合ということが成果をあげて発表されてきている。

次に、一九六〇年に『説話文学と絵巻』が上梓されます。その中に、「それまでは細かな考証ばかりやっていた、それを脱して文学の内部に反映するもので歴史を見ようとする方法を自分では持ち得た」という言葉があります。これらを読むと、この十五年間というのは、夜学の先生をしながら、社会活動もしつつ、いくつもの研究論文が、手応えをもって書かれていった時期と重なるのです。

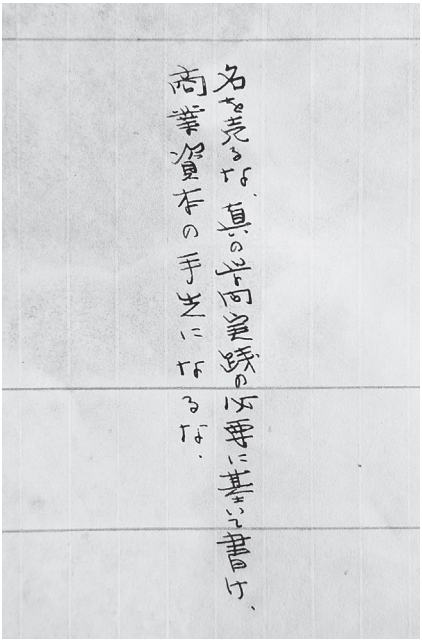
そして、『火山列島の思想』は、本として刊行されるのは一九六八年ですけれど、そこまでの五年間くらいに書かれた論文集です。後ほどテープを聞いていただく「偽悪の伝統」とか、「フダラク渡りの人々」、「心の極北」とか、「飢えたる戦士」、それらのほとんどは、こういう時期に書かれたものです。ですから、従来の国文学とは違う、画期的な論文が立て続けに出されていった、精力的な季節だったわけです。ご本人が「空白の十五年」と呼んだこの時期の最後に、『火山列島の思想』に収められた十一編の論文が実を結んでいった、ということを強調したいと思います。

学生たちには、研究論文も「作品」でなければならない、読ませる魅力がなくては……、とよく言っておられました。文献考証は手段であって、目的ではない、というのが、池田亀鑑教室から出発した益田先生の、執筆の核をなしていたのだと思います。

少し戻りますが、大学を卒業してまだ十年も経っていないころに、先生は、自分の「論文目録」を作りました。膨大な量の論文を、「単行書」「論文」「（機関誌掲載）論文」「資料紹介」「書評その他」「読みもの」と分類して、……綺麗な字で書いていますけれども……、その扉に、どう書いてあったかというのをご紹介します。

「名を売るな　真の学問実践の必要に基いて書け、商業資本の手先になるな」と記されています。まだ三十代半ば、論文を

「論文目録」ノートの扉に書かれた言葉



書き始めて十年というときに、自戒を込めて論文執筆の基本姿勢を、そのように書いているのが、心に響きます。私たちは、ここのコピーを、みんなで分け持っていたりするんですけれども。

こういう高い志で、研究活動の草創期というのが始まる。その一方で、非常勤講師で法政に来てくださっていたわけです。今思うと不思議というか、申し訳ないことには、ゼミと特講の二コマを、普通はそんなことしませんけれど、二日に分けて出校されていたことです。夜からは本務校で夜学教師の生活がある。昼間の大切な時間を二日も法政の学生のために割いてくれていた。ゼミの日は、ゼミの学生と最後までつきあい、喫茶店で話したり、大学近辺を探索したりしてくれた。高校でも大学でも全力で学生たちと向き合い、社会活動もしながら、論文を次々に発表していったというわけです。

この期は決して「空白の十五年」でも何でもないと私は思いますが、ご本人は、「そういう生活をして、法政大学に就職したときは、ちょっときつかった」というようなことをおっしゃっていたことがあります。

この期の猛烈な勉強ぶり、二足三足のわらじを履いて、寝る間も惜しんでの活躍は、岡田さんも巻き込まれていたのではないですか？

岡田　私は、その頃のことはよく覚えていません。ガリ切りしていたことだけは覚えていますけれども（笑）。どうしてかって言いますと、私は国史学科を卒業しましたが、その頃は、ちょうど大場磐雄先生の『古代農村の復原』っていう本が出たりしまして、みんなその本を読み、一種の考古学ブームもあったんですね。私も受験の時にはそれを目指してもいましたけれども、その頃には女子学生で考古学科に入った人もいませんでしたし、私自身もその域に達していなくて。

次の年には、父が「やっぱり古代史をやってほしい」って申しましたので、古代史を勉強することになりました。旧制の国史学科ですから三年ですけれども、三年間の勉強が終わってみますと、その間に考古学に実際に触れることが起こったんですね。叔父が勤めていました都立の神代高校の定時制の卒業生が、ある日教室に飛び込んできて、「何が起こったんだ？」って言

うと、「先生、江戸時代の便所が見つかったんだよ」「みんなどうしたらいいかって言ってるんだ」っていう話になりまして、「それは便所じゃなくて、きっと古代の古い頃の住居址のその真ん中にあった、ご飯を炊く炉の石組だろう」というふうに叔父は言いまして、さっそく私も付いて、小金井の武蔵野郷土館（現江戸東京たてもの園）に訪ねていきました。

そして、その出たところを調査するということになったわけですけれども、調査したところは、調布の町では一番西の外れにあたるところで、今私が住んでおります府中の車返というところからは、一番近い調布なんですけれども、そこのある構内、病院だったところを、今度立て替えをするということになって、土を掘り返したらそういう遺跡が出てきたわけですね。話を聞いて、武蔵野郷土館では、古代ではなくって縄文の専門家を派遣してくださいまして、実際に縄文の中期の住居址を、それにつながってトレンチを入れていきましたので、奈良時代の住居址が二つ見つかるということが起こりました。私は今まで三年間、文書でしか古代というものを知らなかったんですけれども、弥生の登呂まで行かなくても自分の今住んでいるこの多摩の地方にも、そういう古代の住居址があったっていうことが分かりまして、大学院になるような年齢になってから、古代史だけでなく考古学にも手を染めるようになりました。

私の場合は、その時には和島誠一先生のところにお願いにいって、そこの仲間に入れていただくことになりました。和島先生はそのころ岡山の月の輪古墳の、村中をあげての発掘調査に行っていらっしゃいましたけれど、横浜の市史の仕事として、考古学の発掘が始まりました。そこから考古学に手を染めるようになったんです。そのきっかけが、叔父の定時制高校の卒業生の人々の発見だった、ということでした。

私がそういうことになったのは、一つには、叔父の『説話文学と絵巻』が出版されて、それを読んでいましたら、今まで毎日ガリ切りしていた、それに出てきた研究と全然違うんですね。今までは、文書の考証とか、そういうものだったんですけれども、『説話文学と絵巻』の冒頭では、陽成天皇が自分の乳母の生んだ子供を平手打ちして殺したという、そういうことから始まりまして、叔父たちが研究していた、西片会館で毎月開かれる研究会でも、そんな話は全然なかったのに、なんかすごく人間臭いというのかしら、そういうものを、叔父たちは研究していたんだ、ということが分かってきたんですね。

叔父たちの研究している古代のものっていうのは、なんかとっても人間臭いっていうか、もっと嫌な、そういう権力闘争っていうものである、というふうに考えられて。それから私は、叔父の書いているものを読むのが嫌になってしまいました（笑）。それよりも空の下で鍬で土を掘っている方が良くなっちゃったんです（笑）。この二期の段階では、考古学の方に首を突っ込んだということにもなりました。

それよりも前ですけれども、私がそのころ誇りをもっていたのは……、正倉院の展覧が秋の虫干しの時にございますよね。北倉、中倉、南倉と開かれますけれども、その年に開かれないはずだった倉を、「岡田さんの研究で今年は開くようになったんですよ」って、青木和夫さんっていう助手の方から聞かされ

たことがあります。それで私は、あの憧れていた奈良の正倉院にお掃除に行かせてもらっただけでなくって、私自身が、その年計画されていなかったそのお倉を開けさせていただくことになったんだ、ということを、初めて認識しました。

『出雲国風土記』の「天平五年二月三十日」という日付が怪しいということで、京都の藪田嘉一郎さんという古文書を研究してらっしゃる方が、『出雲国風土記』の正当性に対して文句をつけられた本が出たわけです。それに対して、すぐには、古代史の方から何の反応も出なかったんですけれども、私が「大日本古文書」の中の「正倉院古文書」を見ていく中で、「二月三十日」を発見して、ではお倉の中に入っている古文書も出して、実際に当たってみようっていうことになった。そういう出来事も、この二期代には重なっていると思います。

天野　益田先生が文献考証から、より人間臭い文学の方へ軸足が移ったころ、岡田さんは考古学の方へ進んだ、というお話でした。「正倉院古文書」の日付を発見して、「出雲国風土記偽書説」に反論したのは有名な話ですが、それで、その年予定になかったお倉が開けられた、というのは初めて伺いました。

この、猛烈に忙しかった第二期には、例えば、小田急線に乗って新宿までの間に益田先生は原稿を書き進め、岡田さんは下書きを読まされて、新宿の喫茶店で清書して、先生は学校に行くんですけれど、岡田さんが出版社に届けに行く、ということを何度もした、といういきさつを聞いています。陰の支えもあって論文を完成させていた、そんな芸当を演じていたという、益田先生は寝ていないんじゃないかと思われるような時期でした。

『火山列島の思想』が出るのが一九六八年。その前に、先生は法政に就職します。さきほど、論文目録のノートを話題にしましたとおり、大学に就職する時には履歴書と論文業績なんかを提出するのですが、膨大な論文業績を巻き紙に書いて出した、っていう伝説があります（笑）。この場には、もう杉本圭三郎先生もいらっしゃらないので、伝聞でしかないんですけど。堀江拓充先生などは、「あとからよく聞いて知ってるよ」と言っていますけれど。そうした業績を持って、四十三歳の時、一年間は助教授に留め置かれ、翌年、教授になられた。なぜ助教授かというと、「夜学教諭からいきなり大学の教授はないだろう」と、英文科の某教授が待ったをかけたという話は聞いています。伝聞で（笑）。

そして、『火山列島の思想』が出ます。この、日本の固有の神様、火の神は、噴火口の大きな穴をもったオオナムチである、それが日本固有の神だという説。昨今のように地震やら噴火やらが多いと、この説はもっと喧伝されてもいいんじゃないかとも思うんですけれど。もちろん、火山噴火や地震が多いから、この『火山列島の思想』やそれに纏わる本が、いくつも復刊されているのも事実です。

しかも、先生は、日本固有の神は火山だ、火山神だ、というのを、あまり大きな声では言っていないんですね。そうじゃなくて、「日本固有の神というのは、祀る側が忌み籠もって神となってゆく」という、祀る側を重視する論であるわけです。「火山神だ、じゃあ富士山も論じなきゃ」という展開にはならなかっ

た。

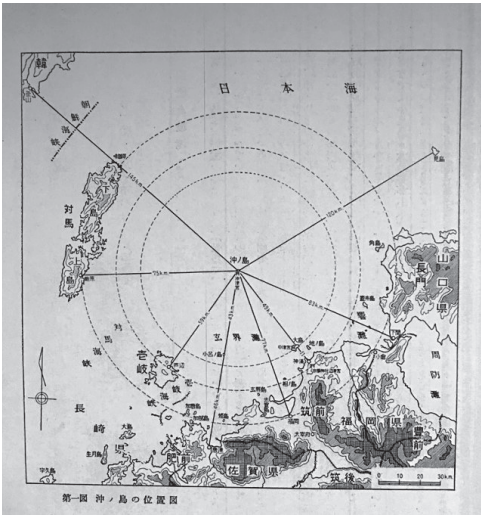
そして、『火山列島の思想』を追うように、『記紀歌謡』と『秘儀の島』が発刊されます。『記紀歌謡』は、叙情の世界というよりも、歌謡劇とか歌謡伝説とか、そういう方からのアプローチです。

そして『秘儀の島』が発刊されるのは、一九七六年。

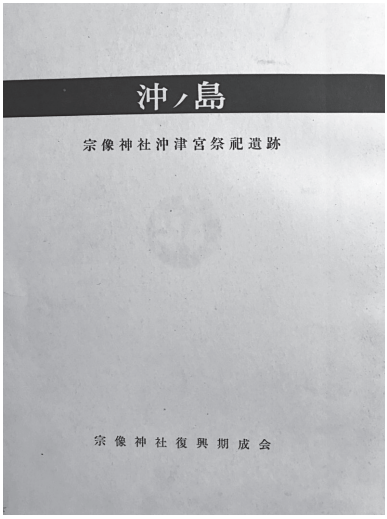
その五年ほど前に、大部の論文「秘儀の島 上中下」が、三ヶ月にわたって雑誌『文学』に発表されました。この「秘儀の島」＝沖ノ島は、今、世界遺産に登録されて話題になっていますし、現在も藤原新也の写真によって展覧会が開催されていますから、目にすることが多くなりました。それを、一九五四年の発掘調査報告書『沖ノ島』『続沖ノ島』、それと『宗像神社史』上下巻、そういうものを丹念に読み込んで、アマテラスとスサノオの誓いの神事、宗像三女神が生まれる神事が浮かび上がってくる、というように読んだのが、益田勝実の「秘儀の島」論です。

これは驚くべきことで、岩陰の発掘の、何号遺跡とかいうところから、アマテラスとスサノオの誓いの神事が立体的に浮かび上がってくる。夢物語じゃなく、それが、六世紀、古墳後期の時代の現物として、益田先生には見えてきたわけです。『古事記』成立以前にその神話はあったんだ、ということを立証してみせてくれた論文です。

『日本列島人の思想』という本が最近出まして（二〇一五年、青土社）、三浦佑之さんが書かれている「解題」に、「そもそも『考古学ジャーナル』をいつも読んでいる文学研究者はほとんどいないのではないか」という感嘆の文章がありますが、先ほどか



沖ノ島の地図



沖ノ島調査報告書

ら言っていますように、益田先生には岡田さんがそばにいるわけですから、『考古学ジャーナル』だろうが、沖ノ島の発掘調査書であろうが、身近にあったわけです。それを何年か睨んで舐めるように読んで、そこで、神話が出来上がる実態が見えてきた、というのが、この沖ノ島論だと思います。ファンタジーを語るのが益田神話学だ、などと言う人もいますけれども、科学者のような緻密な実証を経ての上で、ということだと思います。

『古事記』についても、日本人は不浄を忌む民族だと一般論では言わずに、岩波書店の「古典を読むシリーズ」の『古事記』冒頭、いきなり、「日本人は割り箸を使い捨てにする民族だ」っていうところから始めて、箸の発掘調査を追跡してからスサノオの大蛇退治に進む、という独特のやり方が、益田神話学なんだと思います。現在生きている我々の身体に残留している、「歴史の残留そのものとしての身体」。どうも、益田先生の身体には、そういうものが残留している、古代人のＤＮＡが流れているらしく、目を見張らされるようなことがいっぱいあります。そうした、魅力的な論文がいくつも書かれたのが、この二十三年間のことだと思います。

続けて、第四期に入ります。

定年退職後の最初の五年間くらいは、ご自分の仕事を総括するような講演や座談会をたくさんしていきます。

「年譜」の一九八九年～一九九一年のころ。ご自分の研究の総括をなさった一つとして、岩波セミナーの「日本説話文学の展開」がある。十二時間ほどの音源があるんですが、そのほんの少し、二十分間を、後で聞いていただきます。説話文学というのが、結局、益田先生にとっては一番体質に合った領域だと思わざるを得ないような、魅力のある説話研究であり、語りです。神話も古代歌謡も、結局は、説話という切り口から入り込んでいくように思われ、説話研究が、先生のもっとも特色を発揮し得た分野ではなかったか、と私には思われます。

そうした総括の後、一九九五年から、先生は病気になられ、その後十年余りはもっぱらベッドの上の生活になってしまいます。

その間の重要な事項としては、ちくま学芸文庫の『益田勝実の仕事』五冊を、刊行したことです。それも、益田先生が弱っていたからできた仕事なのであって、お元気だったら、「ああ、そんなものは」って反対されたかも知れません。でも、かねてから「図書館にだけ並ぶような大部な著作集など作りたくない」とおっしゃっていましたから、一般読者にも向けた文庫本とすることで、納得されていたはずだと確信しています。

その五冊に収録したすべての論文は、岡田さんが時間をかけて読んで聞かせたということです。この時期の闘病生活では、すべて、耳から聞く読書だった。一日何時間もですよ。何年間もです。本当に気の遠くなるようなことですけれど、ちゃんと興味を持って集中力を持って聞いていらした。しかも、寄贈された本なんかも、岡田さんの朗読で、耳をすまして聞いていたそうなんです。

岡田　それは、研究書だけではなくって、下関中学の時の同級

生の、関門海峡の西に彦島っていう島があるんですね。そこは、源平の乱の時の平氏が最後に逃げ込んだ落人の集落で、七つの姓を持つ人たちが住んでいた、その一つに植田っていう一族があって、その一人が叔父と同級生で、その植田さんの妹さんが、ずうっと書いていたものをまとめて、二冊の本になっています。お兄さんの方は海軍で、出撃していく時に、台湾にまだかからない日本列島を出たところで、船が沈没して亡くなっちゃったんですね。自分がそういうときに原爆で殺されるべき人だったのに、身代わりになった人がいたために助かってこの世に残された、その運命っていうものをまた痛切に叔父は感じて。その後、妹さんが生活の中での様々な苦労も書いている、そういう本なんかも、とても関心をもって聞いていました。

天野　時間配分が悪くって、持ち時間を超過してしまいました。ただ一つ、最後に、物をおっしゃれなくなっていた先生が発した言葉を、お聞かせ下さい。

岡田　あれは、二〇〇五、六年の頃のことですが、夜中に目を覚まして、「口惜し」「口惜し」とだけ言って、あとは黙ってしまいました。それ以上は聞けなかったのが、今とても残念に思います。

天野　そうして二〇一〇年、益田先生は八十六年の生涯を終えられました。後半は、駆け足になってしまいましたが、私どもの発言はここまでといたします。

（あまの　きよこ・元本学教授）
（おかだ　きよこ）